

ないためにはどうすればよいかと考える前に、なぜその枠が広げられないのか、どうして成績順で切らなければならないのかと反発してほしい。そう問題意識を持つならば、友だち・先生にぶつけていって、何時間かかっても何日かかっても、入りたい学生の中で結論を出すべきで、少なくとも要求をもつ個人個人を離れたところで決定されることに安んじる形に、学生自身もってはいけません。また、それだけにとどまらず、研究室が狭すぎるとか、カリキュラム上のいろいろな問題をなんとかしてくれという場合、一人一人が先生のところへ行くということすらなされていないが、もっと学生がまとまりをもって、行動して

ほしいと思います。4年を終えて、自分たちができなかった問題として、自分自身反省しているのですが、学生のまとまり、いわば、自治会のようなものをコースの場だけでも持つこと、そういうことを一、二年に考えてもらいたいと思います。最後に、総合科学部というのは、いろいろな講座がとれて、何をやっても一応卒業できるわけですが、たとえば、院に行きたい人たちならば、今のうちから、どういう勉強が必要なのか留意して勉強した方がよい。もちろん、社会に出る人についても、社会に出て利益となるような知識を身につけるために、何をどんなふうに勉強すればよいかよく考えていった方がよいということです。(院生)

社会文化コース座談会

5月24日 出席者：高崎，森，志村先生 学生5名
総合科学部は創立して五年目を迎えたわけだが、これにて社会文化コースは教官人事の面で完成したとみてよいだろうか。

現在社会文化には、教授，助教授，講師，助手合わせて20名の先生がおられる。教官人事はさらにこの秋に経済学の教官を得、あと1名助手を迎えて一応の完成をみると考えている。ただし、今後全学の学生増員のためなどで若干の増員があるだろう。

社会文化のカリキュラム内容での特異性は、どのようなものと考えておられるか(特に、法・経済学部との関連において)。

従来、社会諸科学は対象の違い、従ってその研究方法の違いによって、経済学・政治学・法学等と区分されてきた。しかし、現代社会はその発展の過程で、それら各対象相互の結びつき、相互作用を著しく強めてき、周知の通りに、経済は国家(政治)とまた、思想・文化現象も社会の諸運動を通じて、経済、国家その他への影響を強めている。さらに科学は技術に、技術は生産に、生産を通して経済に巨大なインパクトを与え、従ってまた科学・技術・生産と社会諸法則との関連のあり方は、現代の最もアクチュアルな問題の一つとなっている。

これらの客観的現実をふまえて、われわれは現代社会を、科学・技術・経済・政治・法・文化等の有機的統一物としてとらえ、多面的かつ総合的

に研究・教育するため、社会諸科学の伝統的区分にとらわれない単一の大講座として社会文化研究講座に結集しているわけである。

本講座は、このように捉えられた現代社会を研究するにあたって、二つの研究主題、Ⅰ. 社会構造、Ⅱ. 技術・開発を設け、これを主軸とする総合的学習を構想している。すなわち、前者の主題では社会諸科学の統合がめざされており、後者の主題では社会諸科学の統合にとどまらず、さらに自然科学・技術学・人文諸科学との結びつきをもめざし、積極的に境界領域の開拓が意図されているのである。

学生諸君は、この二つのテーマを選択し、それを主軸としながらも、総合科学部の一環としてその特色を生かし、他コースの科目を大幅に、自由に組み合わせ、多彩な、あるいは有機的な、総合性のある学習プログラムを組んでもらいたい。法・経済学部とわれわれとは、相互に補ないあう関係となっている。

われわれのコース履修細目は以上のことを配慮して作られている。

選択の自由が広いことは、ややもすると易きに流れ、四年間何をしたのかわからぬような学生を作ることにもなりかねない。充実した学生生活を送るために、学生諸君は自分のテーマをなるべく早く決めることができるよう、先輩や教官ともよく話し合うことを希望する。

自分のテーマを決められないでいる学生はどうしたらよいのだろうか。

1年生の間は、どの科目を選んでも特に失敗ということはないだろう。一般教育科目では、自分の進みたい専門の基礎を学ぶだけでなく、自分の興味のあるものや、かえって専門的な科目から遠いものを学ぶことが後のために良いことになる。

社会文化には、学生諸君のいろいろな個性をひきだすような授業が用意されているので、いろいろな授業をとる中で、みずからのテーマを見つけていってほしい。それを3年次の演習を通じて育て、4年次の特別研究論文によって結実させるわけである。

3年次の演習と4年次の特別研究について。

みずからの定めたテーマに関連させて、3年次には一つ以上の演習を選択する。この場合、希望する演習が2年次に申告した「群」と相異するときは、「群の変更」をチューターに申し出ればよい。事情によっては、両群にまたがって複数の演習を履習してもよい。特に社会文化コースでは、「群」はあくまでも「選択必修科目群」であり、講座の差異や学生集団の区別では全くない。

4年次に行なわれる社会文化コースの特別研究は3年次において各自が履習した選択必修としての演習を実質的に延長させる形で履修することを原則とする。

第1回卒業生の残した特別研究論文は、論文集として5分冊に美事に製本されて社会文化図書室に置かれている。特に、等雄一郎君の特別研究論文「発展途上国に関する開発理論の現段階」は、優秀論文として他大学の卒業論文と共に、雑誌「流動」（昭和53年7月号）に掲載されている。諸君の閲覧は自由である。

大学院について。

本年4月、かねてからの念願がかなって、われわれの総合科学部の上に、地域研究科と環境科学研究科の二研究科（修士課程）が誕生した。そして、社会文化コースの学生にとっては、この二研究科のどちらにもその進路が開かれている。つまり、地域研究科には比較社会・比較文化研究系をはじめ、社会科学の一層の展開がなされる各系があるし、環境科学研究科においても、われわれをも受け入れるべき環境情報・改善計画系がある。（この場合、文系の科目によって大学院受験ができるよう配慮されている。）

社会文化コースの就職については、どのようなお考えでしょうか。

「飛翔」の前号（No.8）で山田先生が言われているように、社会文化コースの学生は特に、公務員試験とマスコミ関係に切りこんでいってもらいたいと考えている。これは総合科学部の総合的な学際的性格とカリキュラムがこれを指向させるからに外ならないが、ともに難関であることは言うまでもないところである。コースの教官側としてもかねてから自主的に「コロキウム」（勉強会）を開いて、民法や経済学の勉強を援助しているので、諸君の積極的な参加を期待している。

その他にも社会文化コース学生の進路は、まことに幅広く、社会の各界各層に及ぶものと思われる。要は、ファイトを出して勇敢にチャレンジしていくことだ。将来の後輩のためにも大いに頑張ってもらいたい。今年は就職委員長もわが山田先生である。出来る限りのバックアップがすでにいろいろと画策されている。

研究室とロッカーについて。

(1)研究室の開室時間について

総合科学部のコース別研究室の使用時間は、8:00から21:00の間で各コース毎に定めることになっているが、社会文化コースの場合、当初は午後9時までであった。ところが学生の研究室の管理があまりに悪かったので、去年の途中から5時（正確には4時50分）になると閉めるということになった。だが今でも、届け出があれば9時まで使用できるようにしているし、いままで一度も断わったことはない。5時以降使用する場合は、火気、あと片づけ、施設に充分気をつけてもらいたい。

(2)ロッカーについて

昭和49年当初に備えられた30人分の社会文化コース学生用のロッカーは、研究室内の机・椅子などと共に、学部全体の予算から割り当て支出されたお金で購入されたものである。しかし、その後の研究室の充実費用は、すべて各コースの研究費でまかなわれることになっており、その他に財源があるわけではない。毎年、わがコースでは、学生諸君の勉学用として一定の予算が計上されている。決して少額ではない。この予算を使って図書を購入して研究室内の充実をはかってきたわけである。ロッカー購入が学生諸君こそ望むのであれば、教官が反対する意思はあり得ない。しか

し、このときはその分だけ図書購入などにまわされる自らの費用が減少することになる点を十分に理解した上でのごことであってほしい。その他、新たなロッカーの置き場のことも考え合わせてもらいたい。

研究室の図書については、コース内に図書委員

の教官がおり、いままでも学生からの要望を考慮し、購入する図書を決めてきた。今後もっと学生の中から買ってほしい本やその他の備品についての意見が出てくることを待っている。また研究室にある図書については、学生の自主管理を大いに期待している。

環境科学コース

5月26日 出席者 教官：三寺（3群）秀（2群）富永（1群）岡本（2群）鈴木（3群）武森（3群）
学生：約30名（1年から院生まで）

カリキュラムの問題

S₃：まず最初に教養学士の件についてお尋ねしたいのですが。つまり、総科を卒業した時点で我々は教養学士しかもらえない訳ですが、総科は教養学部ではないのですから、僕としては別の名称にすべきではないのかと思います。例えば、総合学士とか……。

T：私たちが文部省に出した最初の案は3つありました。それは、理学士、文学士、学術学士です。しかし、現時点では制度上教養学士と理学士しかない訳です。けれどもそれはあくまでも制度上の問題で、中身は我々独自の教養学士を作りあげて行かねばならないと思います。例えば、東大の教養学士とは違う広大な教養学士を作って行かねばならないのです。それと同時に、総科に対する社会の認識を変えて行くことも必要ですね。

S₃：では次に実質的なカリキュラムの問題について、お尋ねしたいと思います。学生便覧を見て思うのですが、環境の一群と情報の一群とはどう違うのでしょうか。両者は選択必修課目に多くの共通科目があるようですが。

T：情報の一群につきましては、統計的要素が強く数理情報を核においてカリキュラムを組んでいます。環境の一群については、学際領域に渡って数学が果す役割を考えて、単にコンピュータだけの数学ではなく広い意味での本質的な学問を基盤においた、環境科学に寄与することを目指したカリキュラムを組んでいます。つまり、数学のためだけの数学という意味ではないのです。

基礎および専門科目はどこまでやらねばならないか。

S₃：総科の学生は、自分の専門に限らず広い分野にわたって学問をしなければならぬ訳ですが、それぞれ科目について、どれくらいの深さまで修

得しなければならぬのですか？

T：全ての分野を完全に修得しなければいけないという訳ではありません。もちろん、深ければ深い程良いのですが。

S₃：しかし、一つの科目について奥深い所までやることはとてもできません。例えば微積分学なんかは、とても広い訳です。それを一体どのくらいの所までやれば良いのか、具体的な程度を知りたいのですが。

T：もちろん時間的な制限もあるから、自分が将来やりたい領域によって、どの学問をどの程度やるか決ってくるものと思います。そして、どの領域をやるのに、どの学問がどの程度まで必要かについて、よく分からない人は、各教官の指示を受けたいと思いますよ。また実際の授業で、我々は上限を示すことは出来ませんから、まあここまでやってれば良い、という気持ちで教えています。

総科では学生一人々々によって、ケースが違いますから、こういう点からも一律に何をどのくらいやらねばならないと決めることは出来ないのです。

また、基礎と専門とのバランスの問題もあります。これについては、今はまだ総科で完成されていません。現段階では検討中です。今後我々が解決しなければならぬ課題の一つです。

4年間で環境科学をどこまでやれるか。

S₄：今までの話を聞いていますと、環境科学は全ての学問の上に立つものだ、と言われましたが、そうすると環境科学というものは、学部を出ただけではどれだけの特徴が持てるのでしょうか？

T：4年間でそこまで達するのは、ちょっと無理でしょうね。

S₄：それでは、総科で特徴を得るためには院まで進

まなければならぬのでしょうか？現時点では院まで進む人より、学部卒の人が多く訳ですが、そういう人は一体総科で何を学んで社会へ出て行けば良いのでしょうか？

T：総科で4年間学ぶことの意義は、ある問題をいかに解決するか、その方法を身につけることにあるんじゃないでしょうか。例えば、会社に入っている地域のオキシダントを測定せよ、と言われたらどうしますか？その時、ただ測定装置のスイッチを入れれば良い、というのじゃだめなんです。つまり根本的にどうやってオキシダントをなくすのか、という所まで考えられる人にならなければだめな訳です。そういう人材を育成するところに総科の意義があるものと私は思っています。ただ、今までに総科の様な学部はどこにもなかったから、実社会に出てどれだけ役に立つのかは、まだ分かりません。従って、我々としてもどこまでやれば良いのか、4年間で漠然とでも型を作りたいけれども、具体的に示すことは出来ません。しかし、総科はそういった研究をするには良い学部です。学生自身が、いかに意欲を持つかによって、どれ程にまでも出来ます。だから、この問題に関しては、学生がいかに意欲を持つか、ということが大きく左右するんじゃないですか。

環境科学の特徴

S₃：ところで、環境科学の特徴はどういう所にあるんでしょうか？

T：それは難しい問題ですね。我々も今、どの様な特徴を持つのか、模索している所でしてね。つまり、環境科学というものは一律に決められないものなのです。例えば、アメリカの例ですが、ある州では環境科学を公害問題中心に考えていますし、また別の州では原発による放射線の影響中心に考えています。我々は我々独特の環境科学を創りあげていかなければならないのです。

環境科学を学ぶ姿勢

S₃：それでは、僕達は環境科学に対してどの様な姿勢で取り組めばいいのでしょうか？

T：まず第一に目的意識を持つことです。目的意識を持った上で、各パートごとの勉強する必要があります。そういった各パートの問題に対応できる先生がおられるので、学生はそういった先生の所へ足しげく行く必要がありますよ。つまり、我々教官の部屋をもっとのぞきなさい、ということです。何事も積極性を持たねば進歩はないですか

らね。

学生は環境科学をどう考えているのか。

S₂：ところで、現在のところ3、4年生の先輩方が、どのような問題に取り組み、また何をやるうとしていらっしゃるのか、お聞きしたいと思いますか？

S₃：僕は公害問題をやりたいと思っています。それも単に学問的な探究だけにとどまらず、実際の問題に対して今までやって来たことを応用できるようにしたいと思っています。

S₄：僕も環境問題をやるうと思っています。それも自然環境を主体にして、人文・社会分野を取り入れて考えて行きたいと考えています。

S₄：僕は今、卒論のテーマとして、黒瀬川の流域問題に取り組んでいます。それも僕の場合学問的にじゃなく、人の役に立つようにと思ってやっています。しかし、混沌としていて、自分でも何をやったら良いのか分からないというのが今の実状ですね。

M₁：私は広大な卒業生じゃないんですが、環境問題を意識して来た訳じゃないんです。私は地理学をやって来たんですが、地理学というのも、人間と環境との関連で考えていかなければいけないと思ってます。そして、この環境科学の授業ではそういうものがたくさんあるから、私はここに来ました。今のところは、応用地理学的なことをやっています……、地すべりの問題とか……。

現在の環境科学コースに対する要望。

S₃：それじゃこのへんで、現在の環境科学コースに対して、何か要望があれば言って下さい。

S₄：僕は今4年生なのですが、僕が3年生の後期に思ったことが1つあるんです。それは、3年生の後期に環境科学実験Ⅱというのがあったのですが、これは各群に分かれているんです。それで2つの群にまたがった領域をやるうと思っている者は2つ以上の実験を取りたかったのですが、時間割りの上でそれが出来なかったのです。ですから、なるべく多くの実験をとれる様に配慮して欲しいと思います。

T：確かに環境科学をやる人にとって実験は非常に大切ですから、自分の好むものを取れる様に解決する必要がありますね。しかし、皆さんも実験は絶対サボるべきではありませんよ。

S₃：僕は今3年生なんですが、3年生になって実験をやって初めて、各先生のやっておられることが分かった訳です。それで、やはり自分の進路を決